4 地域医療・総合診療実践学寄附講座

1.活動概要

「地域医療・総合診療実践学寄附講座」は、前年度末に活動を終了した「地域医療システム学寄附講座」の後継として平成28年4月1日に設置されました。当講座は、これまでの医師循環システムに関する調査研究や地域医療実習教育に関する調査研究等の成果を踏まえ、「医学生や若手医師への卒前からの一貫した地域医療教育」「総合診療医の育成」「地域医療実践教育拠点の運営」など、地域医療を志す医師の養成を目指して、より実践的な取り組みを進めることを目的としています。

なお、熊本地震の影響で、大学病院の施設もダメージを負い、学生の一部には、自宅が損壊した者もいたため、授業が１週間中断されました。また、甚大な被害を被った益城町及び熊本県医師会からの要請に基づき、5月から7月に掛けて、当講座の教員全員で、益城町の医療支援を行いました。

【主な内容】

① 調査・研究

② 教育活動

- 卒前教育（カリキュラム外教育）
- 卒前教育（カリキュラム内教育）
- 卒後教育

③ 地域医療支援（診療支援）

④ 講演会

2.年間活動実績

月	日	行事
5	26	地域医療ゼミ
	27	第４タームクリクラ振り返り会
6	5	卒後臨床研修プログラム説明会
		基幹型新専門研修プログラム説明会
	17	第５タームクリクラ振り返り会
7	5	第7回地域医療・総合診療グランドラウンド
	6	研修医セミナー
	8	第６タームクリクラ振り返り会
		第1回総合診療専門研修特任指導医講習会
	9-10	プログラム説明会
	22	第３タームクリクラ振り返り会
		第8回地域医療・総合診療グランドラウンド（地域医療ゼミ）
8	8	夏季地域医療特別実習挨拶巡り
	17-19	夏季地域医療特別実習
9	16	第７タームクリクラ振り返り会
	29	地域医療ゼミ
10	27	地域医療ゼミ
11	16	早期臨床体験実習Ⅲ受け入れ施設説明会
	24	地域医療ゼミ
12	2	クリクラ説明会（１・２ターム）
	8	地域医療ゼミ
1	18	医学生・研修医をサポートする会（地域医療ゼミ）
2	17	第9回地域医療・総合診療グランドラウンド
3	3	クリクラ説明会（３～７ターム）
	4	熊本県地域医療支援機構講演会
	23	地域医療ゼミ

3.活動報告

Ⅰ 調査研究

◆ 地域医療実習教育に関する調査研究

今年度から新カリキュラムとして、熊本大学医学部医学科3学年に対する地域医療実習（早期臨床体験実習Ⅲ）を12月5日～9日に実施しました。それに先立ち、11月16日・22日に受入れ施設に対する指導医説明会を実施しました。また、平成30年度に必修化（現在は選択制）される5・6年次学生に対する地域医療実習（特別臨床実習）の実施に向けて、受入れ施設を13施設に増大させるとともに、実習内容の質の向上を図るため、1月14日に各施設の指導医を集めて、ワークショップを開催しました。

◆ 総合診療専門医普及に関する調査研究

新専門医制度が平成30年度実施に延期されたため、県内医療施設との連携を進めるとともに、日本プライマリケア連合学会や支部会、或は他大学等のシンポジウム等において「熊本大学総合診療専門医プログラム」の周知・広報を行いました。また、地域医療･総合診療実践学寄附講座のHPをリニューアルして、広く情報発信に努めました。

なお、これまでの日本プライマリケア連合学会認定の後期研修プログラム（ver2）についても、見直しを進めました。

◆ 医療機関の勤務環境に関する調査研究

熊本県地域医療支援機構の活動報告内

P.9をご参照ください。

◆ 教育拠点に関する調査研究

玉名教育拠点においては、拠点設置後、教育・診療の活動実績が着実に伸びているだけでなく、玉名地域の医療の活性化に大きく貢献していることが確認されました。このことから、他の2次医療圏における第2の教育拠点造りを目指して、同様の成果が期待される地域・施設について、次年度以降検討を進めることとしています。

Ⅱ 教育活動

地域医療システム学寄附講座を設置以来、これまでも医学科カリキュラムの実施に協力してきましたが、今年度から、地域医療･総合診療実践学寄附講座として、医学科長からの正式な依頼に基づき、以下の実習および講義を行いました。なお、熊本県地域医療支援センターへの依頼があった講義も一緒に記載しています。

1年生
- 早期臨床体験実習Ⅰ
- 医学概論

2年生
- 早期臨床体験実習Ⅱ
- 医学英語

3年生
- 早期臨床体験実習Ⅲ
- 公衆衛生学

4年生
- 医療と社会Ⅰ
- 総合診療学
- 臨床実習入門
- チュートリアル

5年生
- 特別臨床実習

6年生
- 特別臨床実習

◆ 早期臨床体験実習Ⅰ　　担当教員：松井

早期臨床体験実習は医学科学生を早期から実習に触れさせることを目的として、２年前に改正された新カリキュラムに基づき、必修科目としてⅠ～Ⅲで構成されています。

早期臨床体験実習Ⅰは1学年を対象とし、従来から実施していた「早期社会体験実習」の名称を変え、3回目の実施となった今年度は9月12日～16日の5日間に渡り実施しました。初日の午前に大学において導入・オリエンテ―ションを実施し、その後県内の19施設（心身障害児（者）施設、慢性疾患療養施設、老人保健施設、特別養護老人ホーム等）で1年生106人が実習を行いました。

また、振り返り発表会が9月27日と10月4日の両日に分けて行なわれ、当講座教員がオリエンテーション～実習～振り返り発表会までのサポートを行いました。

早期臨床体験実習Ⅰ			開講年次	1年生
授業の概要	準備学習を行い、心身障害児(者)施設、慢性疾患療養施設、老人保健施設、特別養護老人ホーム、療養型病院、等の医療･介護･福祉の現場でグループに分かれて見学･体験実習を行う。実習先のスタッフの指導・評価を受ける。実習後は、個人及びグループで振り返りを行い、口頭での発表と資料提出を行う。			
1	2016/9/12	オリエンテーション	オリエンテーションとスモールグループディスカッション	
2-5	2016/9/13-9/16	実習	実習初日から最終日まで、実習先にてあらかじめ設定されたスケジュールで実習を行う。	
6-7	2016/9/27-10/4	発表	実習の報告を口頭での発表と資料提出で行う。	

◆ 早期臨床体験実習Ⅱ

早期臨床体験実習Ⅱは２学年を対象とし、今年度で２回目の実施となりました。実習先が熊本大学医学部附属病院に限定されているため、企画には携わりましたが、医学教育センターが主体で行われました。

◆ 早期臨床体験実習Ⅲ　　担当教員：松井

早期臨床体験実習Ⅲは、３学年を対象とし、新カリキュラムにおける３年間にわたる早期臨床体験実習の総仕上げに当たるものであり、また、上位学年で実施される臨床実習への基礎入門編に位置付けられています。

実習初年度の今年度は、12月5日～9日の5日間に渡り、県内の80医療機関の協力を得て、3年生108人が実習を行いました。初日の午前に導入とオリエンテーションを、また最終日の午後から振り返りとグループ発表を大学内において実施しました。

実習受入に当たっては、11月16日及び22日の両日に分けて、実習受入施設の指導医及び担当事務64名を集め、指導医講習会を開催して実習の指導徹底を図りました。

早期臨床体験実習Ⅲ　スケジュール

日時	12月5日（月）	12月6日（火）	12月7日（水）	12月8日（木）	12月9日（金）
午前	導入・オリエンテーション	実習	実習	実習	実習・挨拶（移動）
午後	（移動）挨拶・実習	実習	実習	実習	振り返り・グループ発表

◆ 特別臨床実習（クリニカルクラークシップ）

5学年末から6学年の秋までの全7ターム（1タームは3週間）で実施される特別臨床実習において、当講座は、平成26年度から地域医療を提供しています。今年度は、県内の13医療機関の協力を得て、49人の学生に対し、地域医療実習を提供しました。

なお、小国公立病院及び阿蘇医療センターについては、熊本地震の影響で、公共交通機関が確保できないため中止となりました。また、平成30年度から地域医療実習が必修化されることを見越し、5学年を対象とする第1タームから、新たに荒尾市民病院、山鹿市民医療センター及び菊池郡市医師会立病院が実習受入先に加わりました。

特別臨床実習		開講年次	6年生
授業の概要	1ターム3週間、各診療科に配属され、診療参加型の臨床実習を行う。合計7ターム、21週間で、診療科配属は学生の希望をもとに調整する。		
特別臨床実習 （クリニカル・クラークシップ）	診療チームの一員として、病棟、外来、検査室、手術室等での患者診療に参加する。実習内容は各実習先から提示される。		

実習受入先	ターム							計
	2016 7/11-7/22	2016 5/9-5/27	2016 5/30-6/17	2016 6/20-7/8	2016 8/29-9/16	2017 1/23-2/20	2017 2/13-3/3	
	3	4	5	6	7	1	2	
小国公立病院							1	1
阿蘇医療センター						1		1
そよう病院	1	1			1			3
荒尾市民病院							1	1
公立玉名中央病院	2	4	3	3	1	3	2	18
山鹿市民医療センター								0
菊池郡市医師会立病院							1	1
人吉医療センター	1	1	1	1		1	1	6
公立多良木病院	1	1	1		1			4
水俣市立総合医療センター	1	1	1		1			4
上天草総合病院		1	1	1				3
御所浦診療所	1	1		1				3
天草地域医療センター	1	1	1		1			4
合計	8	11	8	6	5	5	6	49

※第3タームは2016/4/11～4/28の予定でしたが、地震により中止となり、改めて7/11～7/22に行われました。

◆ その他講義における担当

医学概論		開講年次	1年生
授業の概要	担当教官は講義を行う。受講生は授業の最後にコメントシートを提出する。各自、復習や自己学習を積極的に行う。		
2016/6/27	コミュニケーション（谷口）	一般的な意義、理論、技法、等を概説。ロールプレイでコミュニケーションの体験。コミュニケーションの持つ意味を議論し、コミュニケーション能力を向上させる方法を検討し合う。	
2016/7/4	プロフェッショナリズム・医師道とは（谷口）	医師にとってのプロフェッショナリズムとは何かを考察する。教員による概説の後、映像を視聴し、その後のグループディスカッションなどで更に議論し深める。	
2016/7/11	男女共同参画（後藤）	医師という職業の中で男女共同の仕事としてどの様な問題が存在するか議論。一般的な現状・問題、考え方、近年の動向、等を概説。これからどの様な活動や考えを深めていくか検討。	
2016/7/25	喫煙と社会（谷口）	喫煙に関して現時点でどの様に考えているかを述べ、それぞれが、他者とどの様に同じでどの様に異なるのか議論する。それぞれが概説を元に考察し、今後喫煙問題にどの様に関わっていくべきかの考えを述べる。	

医学英語		開講年次	2年生
授業の概要	Moodleとインターネットを使って、様々なサイトから必要としている情報を集める術を学び、医学英語に親しみ、習熟する術を学ぶ。		
2016/12/14	19章：腫瘍医学（小山）	指定教科書の該当部分及び関連した英語総説、症例記録などを提示、学生各自が読み（あるいは輪読し）、日本語翻訳あるいは英語感想文を作成する。	
2016/12/21	19章：腫瘍医学（髙柳）	指定教科書の該当部分、英語の症例記録等を各自で読み、日本語翻訳を作成する。場合によっては、医師役と患者役でシナリオを用意し、英語でロールプレイ。あるいは英語での医療面接の視聴覚教材を視聴し、その症例についての病歴を日本語にて作成する。	

医療と社会Ⅰ		開講年次	4年生
授業の概要	社会医学の実践に携わっている専門家によるオムニバス形式の講義を行う。具体的には、農的暮らしと循環・共生社会、水俣病の今、日本の医療政策等。		
2016/7/5	地域保健活動（1）医師における男女共同参画とワークライフバランス（後藤）	全国および地域における医師の男女比の変遷や男女共同参画の流れ等について学び、社会および医療従事者のワークライフバランスについて認識し考察を行う事を通して、社会の多様性への理解を深め、将来の医師としてのプロフェッショナリズムを形成する一助とする。	

総合診療学		4年生	授業回数
授業の目的	総合診療学の「臨床入門」の授業の一般学習目標GIO(General Instruction Objective);診療参加型臨床実習を円滑で、実践的に行えるために、臨床での、基本的な態度・習慣、学習方法や知識、技能（基本的臨床能力）を体験し、臨床での学習の動機付けとする。		
2016/4/8	医療のプロセスと医療面接総論（谷口）	医療のプロセスと医療面接の総論について講義、教材視聴、ロールプレイ等を行う。	
2016/4/20	医療面接各論１（谷口）	模擬患者（SP）さんと医療面接の実技を一部の学生が行い、全員で振り返りを行う。	
	医療面接各論２（谷口）		
2016/5/13	身体診察概論（松井）	身体診察の概略と手技に関して。	
2016/5/20	臨床推論概論（松井）	臨床推論の考え方の概説を行う。	
2016/5/27	臨床推論演習１（髙栁）	模擬の臨床ケーススタディをグループ単位で行う。	
2016/6/3	臨床推論演習２（小山）		
2016/6/10	臨床推論演習３（前田）		
2016/6/17	臨床推論演習４（田宮）		
2016/6/24	総合診療概論（松井）	総合診療が求められるものとは？	

臨床実習入門		開講年次	4年生
授業の概要	3週間の短期集中コースとして構成。 第１週は、全体での授業。共用試験実施機構が定めた、OSCEの学習・評価項目に加え、クリニカルクラークシップに必要な、熊本大学で独自に加えた項目について学習。 第２～３週は、共用試験OSCEの学習・評価項目に沿って、特に実技を主とした学習と、第１週に引き続き、熊本大学でのクリニカルクラークシップに必要な項目についても学習する。第４週は、２日間にわたる病棟での看護実習が実施される。 このコースの学習内容は、診療参加型臨床実習に必要な基本的事項に絞ってある。授業の内容は、単に座学だけではなくさまざまな方法で実施される。さらに、学生同士でのロールプレイや、ボランティアの模擬患者さんによる実習も計画されている。		
2016/11/28～12/13	臨床実習入門（谷口、髙栁、前田）	第１週は、全体での授業。共用試験実施機構が定めた、OSCEの学習・評価項目に加え、クリニカルクラークシップに必要な、熊本大学で独自に加えた項目についても学習する。	
		第２～３週は、共用試験OSCEの学習・評価項目に沿って、特に実技を主とした学習と、第１週に引き続き、熊本大学でのクリニカルクラークシップに必要な項目についても学習する。	
		また、第４週は、２日間にわたり病棟での看護実習を実施する。	

チュートリアル実習		開講年次	4年生
授業の概要	配布されたシナリオから、キーとなる事柄を列挙し、それらから考えられる様々な問題点をグループでのディスカッションにより抽出し、問題点の背景や成因について仮説を立て、その仮説を検証するためには何が必要かなどを話し合い、 それに沿って、各自が参考書、文献、インターネット等を駆使して自己学習を行う。さらに、課題に関連した講義や実習を受ける。 次のグループ学習の時間に、各自が学習してきた事柄をグループのメンバーに発表・説明し、他のメンバーの内容と付き合わせてディスカッションする。課題のまとめとして、反省・評価を行い、自己や他のメンバーならびにチューターの活動状況・貢献度などに対して、自己および相互に反省・評価を行う。 最後は、全体発表を行う。発表内容は、取り組む課題（目標）、取り組みの過程と結果をプロダクトとして発表する。		
2017/1/23～1/27	第一週チュートリアル（前田）	課題（シナリオ）に沿って問題抽出、自己学習、グループ発表、全体発表を行う。また課題に関連した講義・実習を受講する。	

Ⅲ 診療

大学病院においては、「総合診療科」の外来診療を月曜日から金曜日まで実施し、専門診療科以外の受診を目的とした初診患者を中心に診療を行いました。また、大学病院の救急外来診療等も担当しました。
玉名教育拠点にては、「総合診療科」の外来および病棟診療を行いました。また同院の救急診療にも携わりました。（詳細はP.16をご参照ください。）

その他の熊本県内の医師が不足している病院に対し、県からの要請に基づき、診療支援活動を行いました。

大学病院　総合診療外来

月	火	水	木	金
（谷口）	松井	前田	前田	松井
	髙柳	小山	（谷口）	髙柳

学外診療支援

松井	公立小国病院（2016年4月）、益城町での支援（地震発生後）
髙柳	そよう病院、公立玉名中央病院
前田	上天草総合病院、水俣市立総合医療センター

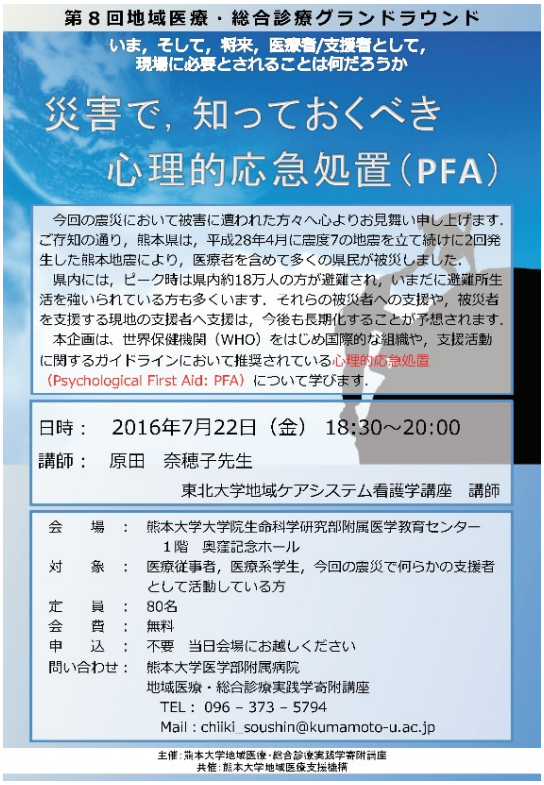
Ⅳ 講演会

◆ 第7回地域医療・総合診療グランドラウンド『夢を実現しよう！セルフコーチングのすすめ』

平成28年7月5日第7回地域医療・総合診療グランドラウンド『夢を実現しよう！セルフコーチングのすすめ』を開催しました。

講師：秋田大学　総合地域医療推進学講座寄附講座　准教授　　蓮沼　直子先生

◆ 第8回地域医療・総合診療グランドラウンド『災害で知っておくべき心理的応急処置（PFA)』



平成28年7月22日第8回地域医療・総合診療グランドラウンド『災害で、知っておくべき心理的応急処置（PFA）』を開催しました。

講師：
東北大学地域ケアシステム看護学講座　講師
原田　奈穂子先生

PFA講習会

翌23日に熊本大学臨床医学教育研究センターで、Psychological First Aid (PFA)の1日研修会を開催しました。参加者は研修会を通して、WHOの定めた全ての支援者が身につけておくべき心理社会的支援の心構えと対応方法について正しい知識を得ることができました。

◆ 第9回地域医療・総合診療グランドラウンド『熊本県のへき地医療を考える』

平成29年2月17日第9回地域医療・総合診療グランドラウンド『熊本県のへき地医療を考える』を開催いたしました。

講演①【熊本のDr.コトー診療所
ー離島の現実とそこから考える地域医療ー】
上天草市立湯島へき地診療所所長　國友耕太郎先生

講演②【卒後5年目のへき地医療】
山都町包括医療センターそよう病院　総合内科
下村　茉希先生

③ワールドカフェ

4. 後期研修プログラム

熊本大学地域医療支援・総合診療後期研修プログラム

（Residency program for Community, Family and General Medicine of the Kumamoto University Hospital）

当プログラムは、2015年4月から、大学病院として日本プライマリ・ケア連合学会認定の家庭医療専門医後期研修プログラム（Ver.2）として開始し、今後導入予定とされる「総合診療専門医制度」に対応することを目指しています。当プログラムは、熊本大学が提供するプログラムですが、熊本県内の多数の公的医療機関が参加協力した“オールくまもと”の研修体制が特徴です。

中でも、地域の中核病院である公立玉名中央病院には、当講座の教員を常駐させた教育拠点を2015年に設置しました。教育拠点においては、卒前から卒後にいたるまで一貫した教育の指導体制の確立へ向け、充実を図ってきました。専攻医は、臨床や研究の指導を受ける傍ら、実習や研修を受けるためにやって来る医学生や臨床研修医等の後輩を指導することで自身の学びを深めることができる屋根瓦式の教育を実践しています。

◆ プログラムの対象者

- ✓ 将来、診療所～中規模病院での開業を含めたキャリアを考えていて、軽症から重症まで様々な問題を抱えた患者の診療を行う臨床能力を身につけたい。
- ✓ 中～大規模病院の病院総合医として、併存疾患の多い患者の主治医機能を担い、頻度の高い一般的なベッドサイドの手技を実施でき、診断困難事例への対応ができるようになりたい。
- ✓ グループホーム、老健施設、特別養護老人ホームなどの施設入居者の日常的な健康管理ができ、施設入居者の急性期の対応と入院適応の判断を、入院施設と連携して行うことができるようになりたい。
- ✓ 地域連携を活かした退院支援や、緩和ケア（在宅を含む）、リハビリ、在宅診療などに興味がある。
- ✓ 現在、すでに医師として十分経験があるが、開業前にトレーニングを行いたい／現在、休職中であるが、復職の場としてこの領域に興味がある。
- ✓ 診療の場で生じた疑問について、EBM手法を利用して解決でき、次の学びや実践の課題を設定し、学び続けることができる医師になりたい。
- ✓ アカデミックな面も経験を積みながら、将来、大学院や海外留学などに進んでみたい。

◆ 家庭医・総合診療医とは

「日本プライマリ・ケア連合学会 総合診療医紹介ビデオ」より

多くの人が健康上の不安や課題、特性をいくつも抱えながら生きるこの時代、患者を３６０度診られる、幅広い知識と視野が必要です。ひとつの臓器にとどまらず、それぞれが影響する関係や原因を推論できる高い診断力と、他の診療科との連携を見極める力が求められます。

病い（やまい）には、背景があります。家族の関係性や職場の環境など、病いの根っこにアプローチする医療が求められています。患者個人の治療はもちろん、その生活を支える家族もまるごとケア。良き伴走者として、医療・福祉専門職だけでなく、学校・職場とも連携し、患者の暮らし方に合わせコーディネートします。

慢性疾患を抱えながら一生を終える人が6割とも言われる今、病いや障がいとともに生き抜く時代がきています。医療の守備範囲は、保健や福祉、介護にとどまらず、住宅環境や働き方、町全体の行政計画にまで広がっています。そこで求められるのが、住民の医療ニーズを把握し、それを地域に反映する力。町全体を俯瞰する視点をもって、病気の予防に働きかけたり、社会や人との関わりを紡ぐ医師に期待が高まっています。

◆ 研修施設一覧（平成28年度時点）

1	くまもと森都総合病院
2	熊本赤十字病院
3	熊本大学医学部附属病院
4	国立病院機構熊本医療センター
5	沢田内科医院
6	慈恵病院
7	熊本総合病院
8	八代市立病院
9	八代市立椎原診療所
10	人吉医療センター
11	球磨郡公立多良木病院
12	公立玉名中央病院
13	安成医院
14	国保水俣市立総合医療センター
15	天草市立河浦病院
16	天草市立御所浦診療所
17	天草市立栖本病院
18	天草地域医療センター
19	天草中央総合病院
20	上天草市立上天草総合病院
21	上天草市立湯島へき地診療所
22	国民健康保険天草市立新和病院
23	山鹿市民医療センター
24	阿蘇医療センター
25	産山村診療所
26	小国公立病院
27	山都町包括医療センターそよう病院

◆ 研修プログラム

プログラム期間は原則として3年間で、総合診療専門研修、必修の領域別研修、その他の領域別研修で構成されます。その他の領域別研修は自分のキャリアに合わせて自由に調整可能です。

総合診療研修	総合診療Ⅰ（診療所・中小病院）	6ヶ月以上	合計 18ヶ月 以上
	同号診療Ⅱ（病院総合診療部門）	6ヶ月以上	
領域別研修（必修）	内科	6ヶ月以上	
	小児科	3ヶ月以上	
	救急科	3ヶ月以上	
選択科研修	総合診療、皮膚科、整形外科、精神科、etc…	6ヶ月	

総合診療研修・必修領域研修機関一覧

総合診療Ⅰ	小国公立病院	山都町包括医療センターそよう病院	産山村診療所
	澤田内科医院	安成医院	御所浦診療所
総合診療Ⅱ	熊本大学医学部附属病院	熊本赤十字病院	人吉医療センター
	公立玉名中央病院	上天草市立総合病院	
内科	人吉医療センター	くまもと森都総合病院	熊本市民病院
	熊本総合病院	熊本大学医学部附属病院（神経内科）	熊本大学医学部附属病院（循環器）
	公立玉名中央病院	天草郡市医師会立天草地域医療センター	
小児科	人吉医療センター	公立玉名中央病院	慈恵病院
救急科	熊本大学医学部附属病院	人吉総合病院	熊本市民病院
	公立玉名中央病院	国立病院機構　熊本医療センター	

3年間のスケジュール例

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1年目	熊本大学医学部附属病院 総合診療科		公立玉名中央病院 総合診療科									
2年目		公立玉名中央病院 糖尿病内分泌科			公立玉名中央病院 麻酔科	公立玉名中央病院 循環器内科			慈恵病院 小児科 うち１ヶ月は選択科研修期間			
3年目	安成医院			沢田内科医院			公立玉名中央病院 皮膚科	公立玉名中央病院 整形外科		国立病院機構 熊本医療センター 救急科		

熊本県公立玉名中央病院にて後期研修をさせていただいております専攻医2年目の楯と申します。本年度は内科選択科目として糖尿病内分泌科、循環器内科、選択科として初期研修でローテートできなかった麻酔科、また必修科として小児科を同院にて研修しました。糖尿病内分泌科では、生活習慣病を中心とした慢性疾患の外来管理の他に、糖尿病精査及び教育目的を中心とした入院を受け持ち、循環器内科では、心不全、不整脈、虚血性心疾患の急性期対応と入院管理が主体でした。いずれの科でも将来医療資源の限られた診療所で必要とされる超音波手技も検査技師の指導のもと習得できました。麻酔科では鎮静鎮痛薬の使い方や気道確保手技の習得をし、小児科では、頻度の高い疾患の救急対応から慢性期の外来管理まで数多くの症例を経験させていただきました。このように、本年度の研修内容は、将来一般内科開業医を目指す私としては、非常に効率のよい研修であったと感じています。（専攻医2年目　楯 直晃）

2016年4月から熊本大学医学部附属病院の地域医療・総合診療実践学寄附講座の後期研修プログラムに参加しています。2016年5月からは、総合診療IIに相当する期間として、玉名市にある公立玉名中央病院で研修を行いました。総合診療科に所属し、一般外来、救急外来、入院病棟を担当させていただきました。様々な症例に関して、初療から退院までをマネージメントするトレーニングを積むことが出来ました。また、週1回は玉名郡玉東町にある、安成医院で訪問診療や往診を担当させていただきました。継続的に患者さんと関わり、問題が起きた場合には玉名中央病院での入院に繋げ、退院後には再び訪問診療を行った症例もありました。その中で御家族やケアマネージャーさん、訪問看護師さん等とのカンファレンスを開き、患者さん本人も含めて、症例に関わる全ての人々とコミュニケーションをとることの重要性や難しさを実感しました。このように、入院前から退院後まで、患者さんの全てのフェーズに関わり、入院中だけではなく、患者さんの普段の生活背景にも目を向けた医療を経験することが出来ました。総合診療医を志す私にとっては、大変貴重な機会であったと感じています。（専攻医1年目　田中 顕道）

平成28年度は家庭医療専門医後期研修の一環で、公立玉名中央病院総合診療科で一般外来、病棟業務、救急外来での業務に従事しました。その中で初期研修時代の2年間との一番大きな違いは、主治医として業務を行ったということです。主治医として業務を行うということは、初診から終診まで診療に携わるということであり、病状、治療、退院後の方針まで自分で決定し説明を行わなければならなりません。もし患者側の期待に応えられない場合は緊迫した場面になり、相手を失望させてしまうこともありますが、患者側から心からの感謝の気持ちをいただく場合もあります。日常業務は多忙であり疲弊していることもありましたが、治療に成功した時や、患者や家族からの感謝の気持ちを受け取った時の感動を味わえることで、モチベーションを高く保ち続けることができました。これは主治医になったからこそできた経験であり、初期研修を終えたばかりの状態でそんな責任ある立場を務めることは上司のバックアップなしでは考えられません。今後プライマリケア医を志す自分にとって、この1年間の経験は今後の医師人生の中で大きな意味を占めることになるはずであり、このような経験をさせていただいた上司には心から感謝しています。そして、後輩たちが同じような感動を経験できるよう今後は自分がバックアップしていきたいです。（専攻医1年目　中村 孝典）

5. 指導医養成プログラム

熊本大学総合診療指導医養成プログラム

（Kumamoto University Faculty Development Program for Community, Family and General Medicine: KFD-CFG）

このプログラムは、熊本大学が提供する独自の指導医養成プログラムになります。大学という教育・研究機関が提供するプログラムである特色を活かして、個別のニーズに合わせて総合診療・家庭医療の臨床経験だけでなくアカデミックなキャリアも積むことができることが特徴です。内容は専門医を取得してから最初の専門医更新までの5年間の教育に特化しており、主に卒後5年目から卒後12年目の若手医師を対象にしたプログラムです。更には、医学生から専攻医までの様々な世代への教育の経験ができ、連携機関も県内多数に存在するため、多彩な診療能力をニーズに応じて学ぶことができます。

また、指導医の資格を取得後の様々なキャリアに即し、特にSpecial Interestを深められるように自由選択性の研修を2年ほど取り入れています。Special Interestの領域については、各人の興味のある分野をさらに伸ばせるよう熊本県内の医療機関で研修が開始できるように熊本大学が全面的にバックアップしていきます。

◆ プログラムの対象者

1. 専門医機構における総合診療研修の指導医条件に該当する、または平成30年度から該当となる予定の方
2. 卒後5年目～卒後12年目の方

※参考：平成29年度時点における専門医機構における総合診療指導医要件は以下の通りです

1．日本プライマリ･ケア連合学会認定のプライマリ・ケア認定医、及び家庭医療専門医
2．全自病協･国診協認定の地域包括医療･ケア認定医
3．日本病院総合診療医学会認定医
4．大学病院または初期臨床研修病院にて総合診療部門に所属し総合診療を行う医師（卒後の臨床経験7年以上）
5．４．の病院に協力して地域において総合診療を実践している医師（卒後の臨床経験7年以上）
6．都道府県医師会ないし郡市区医師会から«総合診療専門医専門研修カリキュラムに示される「到達目標：総合診療専門医の6つのコアコンピテンシー」について地域で実践してきた医師»として推薦された医師（卒後臨床経験7年以上）

◆ 研修期間（5年間）

1. 指導医養成基盤研修（3年ほど）
   - 総合診療研修施設（病院総合医・家庭医）での指導医研修
   - 1年程度の大学教員（医員待遇）研修
2. 自由選択制研修（2年ほど）
   - 個別のニーズに合わせて選択式の研修
   - Special Interest研修

     例）各種専門研修、開業・開業準備、留学等

     各専門研修には、例えば、救急や緩和医療、在宅医療、などを準備しています。

◆ 一般目標

臨床能力

- 理論の実践と深化
- 包括的診療能力の向上
- ニーズに応じた経験

教育能力

- 教育理論の実践
- カリキュラムの作成

管理・運営

- 診療科の管理・運営
- 専攻医研修プログラムの管理・運営

研究

- 研究プロトコルの立案
- 研究論文執筆

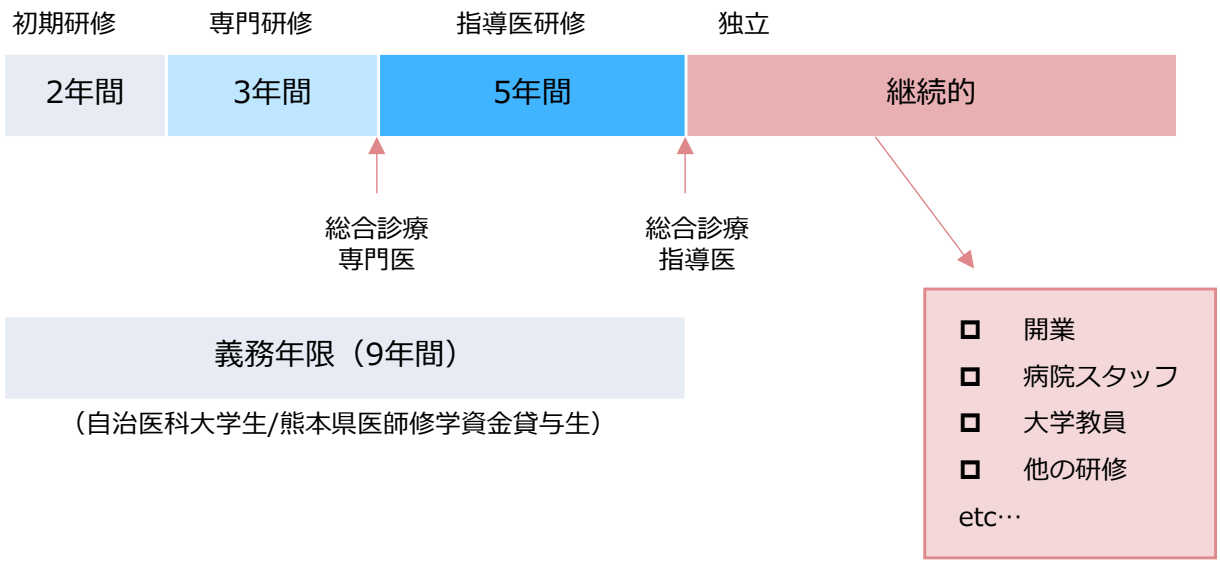
研修プログラム例（病院総合診療を専攻した場合）

	第１季	第２季	第3季	第4季
1年目	病院総合診療 専門医試験受験	病院総合診療	病院総合診療	病院総合診療
2年目	病院総合診療	病院総合診療	病院総合診療	病院総合診療
3年目	Special Interest1	Special Interest1	Special Interest1 臨床研修指導医講習会	Special Interest1
4年目	家庭医療	家庭医療	大学 （研究、教育業務も）	大学 （研究、教育業務も）
5年目	Special Interest2	Special Interest2	Special Interest2 総合診療指導医講習会	Special Interest2

◆ 研修後のキャリアについて

指導医養成プログラムでは、世界水準の質の高い指導医を１つのゴールとして、総合診療の指導医習得および、家庭医・病院総合医としてのBrushUP，Special Interestの選択（専門医機構の今後の動向に合わせ検討）など、有意義な経験を積んでいただければと思っています。もちろん、指導医になることがゴールではなく、指導医習得後も更なるキャリア形成の機会を提供したく思っています。具体的には、指導医として地域医療従事、国内外の留学、大学院への進学、大学教員、開業（新規・継承）などがあると考えています。

また、このプログラムは、県の医師就学金貸与制度や自治医大の卒後研修など、9年間の義務年限がある方々にとっても義務の研修を実施しながら、キャリア形成が可能で、義務終了後の次のキャリアにも結びつけることができる研修であるのも特徴です。



5 玉名教育拠点

1.活動概要

玉名教育拠点は2015年４月、公立玉名中央病院に地域医療の支援及び地域医療の実践教育を行うべく開設されました。２名の常駐寄附講座教員でのスタートでしたが、現在、後期研修の専攻医３名が加わり、さらに地域医療・総合診療実践学寄附講座から人的サポートも拡充されており、病院の診療支援および実践的な教育の提供という目標達成のための体制に徐々に整備されつつあります。

2016年は初期研修医プログラムの「総合診療」の選択研修の受け入れも増え、特別臨場実習（クリニカル・クラークシップ）の地域医療実習も2015年に引き続き受け入れています。地域医療・総合診療実践学寄附講座スタッフは、医学生、初期研修医、専攻医とともに総合診療科として救急外来、一般外来、入院、在宅医療にとり組み、地域の医療を支援しつつ、実践的な教育を行なっています。

今後、地域医療に貢献するため、地域での総合診療科の認知度、研修の場としての教育拠点の認知度をさらに上げ、地域での卒前、卒後の医学教育を継続し、充実させていかねばならないと考えています。

2.年間活動実績

月	日	行事
4	2	第6回　九州地域医療研究会
5		
6	11-12	日本プライマリ・ケア連合学会学術大会
	6/23～8/4	モーニングレクチャーシリーズ「感染症」
	16	玉名　クリクラ発表会
7	7	玉東町の子育て支援講座
		玉名　クリクラ発表会
	21	玉名　クリクラ発表会
8	6-7	PIPC熊本セミナー
	13	玉名在宅ネットワーク共催「バイタル教室」
	27	第27回西部商店街「ザ・夜市」公立玉名中央病院／健康チェックブース
9	6	玉名在宅ネットワーク共催「バイタル教室」
	20	専攻医主催　レクチャー「心不全」
10	16	INARS玉名
	22	公立玉名中央病院　第12回院内学会
	29	第４回有明地区合同研修医カンファレンス
11	18	玉名郡市薬剤師会勉強会
	22	専攻医主催　レクチャー「糖尿病」
12	28	専攻医主催　レクチャー「頭痛」
1	27	専攻医主催　レクチャー「小児プライマリ・ケア」
2		
3		

3.活動報告

教育活動

◆ 特別臨床実習

地域医療・総合診療実践学寄附講座　P.21に関連ページあります。

熊本大学医学部では、5年生の1月から6年生の9月までに1ターム3週間の特別臨床実習（地域医療クリニカル・クラークシップ）を合計7ターム実施しています。玉名教育拠点では、1タームを3名の定員で地域医療教育を実施しました。

今年、新しい取り組みとして、各学生に入院患者の担当を割り当て、それぞれが日常診療業務に医療スタッフの一員として診療に参加し、診療の中から自らのクリニカルクエスチョンを見出し、これに基づいた論文検索から担当患者への適応までを期間内で実践することとしました。

第3週に学習成果の発表を抄読会形式で実施し、評価の場としました。その結果、3週間を通して患者の診療を経験すると同時に、論文検索を通して疾患についての学習を深めることができ、充実した実習であったとの学生からの評価を得ることができました。

課題としては、この学習手法を実行する為には、指導医、専攻医、研修医、医学生の「屋根瓦式」の指導・教育体制が不可欠であり、この体制無しでは実現可能性は低くなることです。

来る2017年度は、更に多くの医学生の参加が見込まれており、地域での医学教育の質の向上は喫緊の課題と言えます。

玉名教育拠点における週間スケジュール

週間スケジュール（第1週）					
	月	火	水	木	金
7:30			プライマリケア レクチャー		
8:00				モーニング レクチャー	
8:30	医局ミーティング／総合診療科入院患者棟回診				
9:00	外来研修（小山）	外来研修（小山） or 訪問看護	外来研修（田宮）	外来研修（髙柳） or 訪問看護	訪問診療 （安成）
13:30	外来レビュー	外来レビュー・ 総合診療科入院患者 カンファレンス	訪問診療（安成） or 緩和ケア回診 （不定期） or 病棟研修	外来レビュー /各種講義	
15:00	病棟研修			病棟研修	病棟研修
16:30	新患カンファレンス	病棟回診（６F）			
17:00	振り返り				週間振り返り
17:30	自己研修				

週間スケジュール（第2週）					
	月	火	水	木	金
7:30			プライマリケア レクチャー		
8:00				モーニング レクチャー	
8:30	医局ミーティング／総合診療科入院患者棟回診				
9:00	外来研修（小山）	外来研修（小山）	外来研修（田宮） or 訪問看護	外来研修（髙柳）	訪問診療 （安成）
13:30	外来レビュー	外来レビュー・ 総合診療科入院患者 カンファレンス	訪問診療（安成） or 緩和ケア回診 （不定期） or 病棟研修	外来レビュー /各種講義	
15:00	病棟研修			病棟研修	病棟研修
16:30	新患カンファレンス	病棟回診（６F）			
17:00	振り返り				週間振り返り
17:30	自己研修				

週間スケジュール（第3週）					
	月	火	水	木	金
7:30			プライマリケア レクチャー		
8:00				モーニング レクチャー	
8:30	医局ミーティング／総合診療科入院患者棟回診				
9:00	外来研修（小山）		外来研修（田宮）	外来研修（髙柳）	実習総括
13:30	外来レビュー	外来レビュー・ 総合診療科入院患者 カンファレンス	訪問診療（安成） or 緩和ケア回診 （不定期） or 病棟研修	外来レビュー /各種講義	
15:00	病棟研修			病棟研修	
16:30	新患カンファレンス	病棟回診（６F）			
17:00	振り返り			ジャーナルクラブ	
17:30	自己研修				

プライマリケアレクチャー	熊本県地域医療支援機構で受講可能なオンラインレクチャーである。
モーニングレクチャー	臨床のみならず、地域医療に関するレクチャーである。
各種講義	検査技師によるグラム染色・超音波検査の講義（実演を含む）、呼吸器内科医による胸部X線読影の講義。
ジャーナルクラブ	自身のクリニカルクエスチョンに基づいて選択した論文についてプレゼンする。また評価する場である。

◆ 初期臨床研修（総合診療科研修）

2015年4月時点で、公立玉名中央病院は、基幹型研修プログラムに1名の研修医がマッチし、熊本大学医学部附属病院のプログラムの協力医療施設として1名、計2名の初期臨床研修医(研修医)が着任しました。玉名教育拠点は、この中でも、総合診療科研修を担当し、指導を行いました。

まず総合診療科研修で研修医は、外来・入院・訪問診療を研修し、自らが診療の始めから終わりまでを一貫して実践し、研修医中心の参加型研修を実践しました。研修医は患者を「主治医」として担当し、指導医との連携の中で中心的な役割を担います。この事で、研修医からは「自分の患者」という意識が芽生え、責任感と医師になったことの実感が得られたとの評価を得ました。

課題としては、初期臨床研修医の期間は、月ごとの成長が著しく、研修時期に応じて研修医の臨床能力に大きな差が生じ、担当患者数のみならず、患者の重症度や疾患の種類で、研修負担の調整が非常に難しく、場合によって研修医の評価が低くなることがあるということです。この問題を基に、今後としては研修医側のニーズや臨床能力の把握を指導医側として事前に把握する為の、面談を行うこととしました。

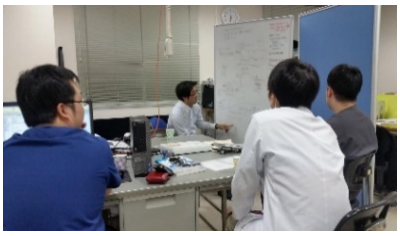
◆ 総合診療専門医（専攻医）研修

専攻医研修プログラムで、玉名教育拠点は「総合診療Ⅱ」を実施しており、2016年度は2名の専攻医が研修しました。彼らは総合診療科研修のみならず、救急研修も並行して行っており、週に1日は訪問診療も実践しました。この為、季節に応じて担当する患者数は10名を超えることが通常になり、日常業務の負担はかなりのものとなりました。

この点を改善すべく、今年度は、これまでの完全主治医制から診療科主治医制に変更し、土日祝祭日のオンコール体制をシステム化しました。これにより、専攻医からは平日の激務から解放されるメリハリができたとの評価を得ました。

更なる課題としては、現在のシステムであると、専攻医のマンパワーに依存的となり、専攻医の在籍数に応じて、実現可能性が低くなってしまいます。従って、今後としては専攻医が何名になろうと、システムの調整を必要としない、指導医層の充実化が喫緊の課題と言えます。

玉名教育拠点での活動の様子



診療

公立玉名中央病院にて、総合診療科での外来および病棟診療を行いました。また、同院の他診療科からの相談や救急診療にも携わりました。

総合診療科での診療に当たり、玉名教育拠点に常駐する指導教員２名の他、研修医、地域医療・総合診療実践学寄附講座の教員・医員も外来診療に携わりました。

公立玉名中央病院　総合診療科

月	火	水	木	金
小山（指導医）	田宮（指導医）	田宮（指導医）	田宮（指導医）	小山（指導医）
田中（専攻医）	小山（指導医）	中村（専攻医）	田中（専攻医）	香田
	田中（専攻医）		髙柳	

＊指導医は週に1度、熊本大学医学部附属病院で診療や公立玉名中央病院での症例についてのカンファレンスを行っています。

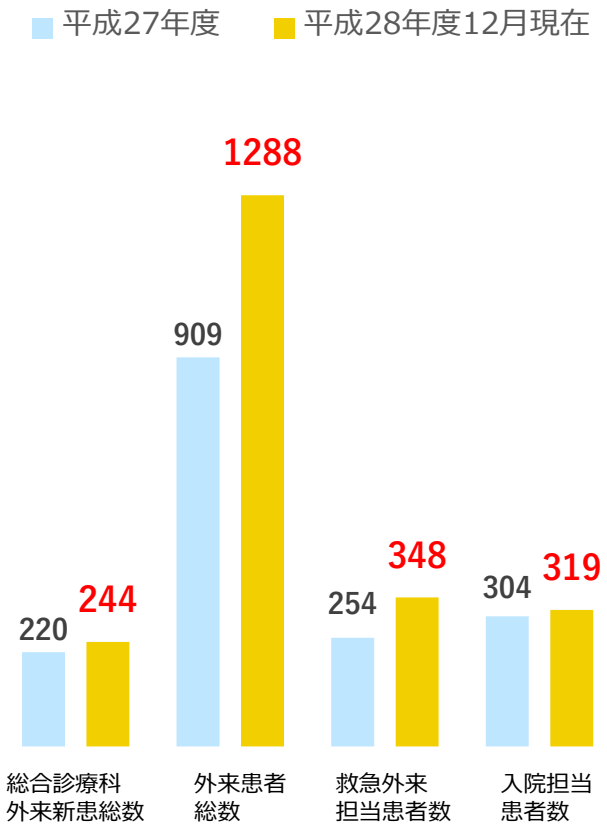
年間診療報告

玉名教育拠点開設当初に比べ、専攻医および地域医療・総合診療実践学寄附講座からの非常勤のスタッフ加わったことにより、玉名中央病院での診療において総合診療科の役割は大きくなっています。

医学生、初期研修医、専攻医および地域医療・総合診療実践学寄附講座スタッフがチームを形成し、総合診療科外来として外来診療および他診療科からのコンサルト対応を行うとともに、2016年度から水曜日を除き、連日、午前中の救急外来も担っています。

右の図に示すごとく、総合診療科外来新患総数、外来患者総数、救急外来担当患者数および入院担当患者数はいずれも、28年度は12月時点で27年度の総計を上まわっていました。

地域に総合診療科の存在の浸透が進みつつあり、受診希望者や地域医療機関よる紹介患者数が増えたこと、先に述べたように総合診療科が担当する救急外来担当時間が増加したことによると思われます。



⑥ 熊本県医師修学資金貸与制度

1.地域医療ゼミ

Ⅰ 概要

地域枠学生等（熊本県医師修学資金貸与学生）に対し、地域医療に関する様々なテーマで毎月1回ゼミを開催しました。

熊本県知医師修学資金貸与学生は52人おり、各学年の人数は右の表のとおりです。

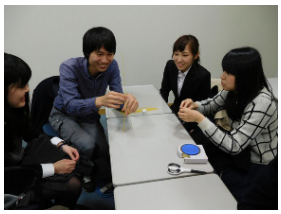
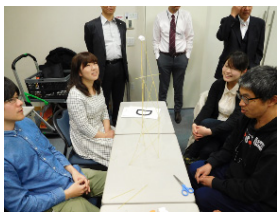
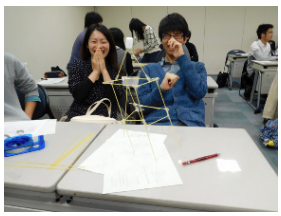
1年生	8人
2年生	8人
3年生	7人
4年生	14人
5年生	7人
6年生	8人

Ⅱ 活動報告

0

2016年3月24日、前年度最後の地域医療ゼミが開催されました。
卒業を迎える前年度の6年生と、入学予定の1年生を迎え、講演やレクレーションを行い、楽しく地域医療ゼミを終えました。

【講師】
球磨郡公立多良木病院在宅医療センター
春口　洋賜　先生

医学部生ら「地域医療ゼミ」

熊本大 実習などで現場学ぶ

熊本大医学部の学生らが、地域の医療機関での実習などを通じて現場を学ぶ「地域医療ゼミ」を続けている。有志による勉強会で、学生たちは「学生時代から現場を知ることができる」と話している。

同ゼミは2009年スタート。県内の高校出身者を対象にした地域枠入学者と、県医師修学資金の貸与を受ける学生が対象。いずれも卒業後は、地域の医師不足解消のため県内の地域医療機関で一定期間勤務することが見込まれており、これまでに約50人が受講している。

ゼミは月1回。医師による講義のほか、患者の症状から病気を予測する「臨床推論」などがある。1～6年まで参加するため、上級生が下級生に教えながら進む。夏休み期間中は、阿蘇や玉名などの公立病院や診療所で数日間の実習もある。訪問診療の現場にも出向き、地域での取り組みを学ぶ。

ゼミで6年間学び、4月から人吉医療センターで研修に入った平賀円さん(24)は「生の現場を見ることで、将来のイメージをつかむことができた。これからゼミの同志を大事にし、皆で地域を支えたい」と話す。

3月末には、熊本市中央区の県民交流館パレアで15年度最後のゼミがあり、公立多良木病院副企業長の春口洋賜医師が講演。「医療だけでなく、介護や行政関係者と連携し、地域で一貫して患者を病院と自宅で見守ることができる」と地域医療の意義を語った。

県医療政策課によると、県内の医療施設で働く医師数は熊本市に集中。同市を除く県内合計（14年末）は人口10万人当たり182・3人で、全国平均233・6人を下回っている。

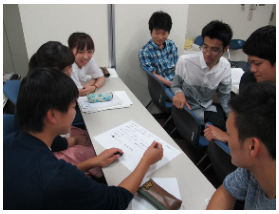
ゼミを担当する熊本大病院の松井邦彦特任教授は「県内各地で質の高い医療を提供し、医師不足による問題解決にもつながるよう、学生の研さんを支援したい」と話している。（林田賢一郎）

公立多良木病院の春口洋賜医師（左）の講演を聴く熊本大医学部地域医療ゼミの学生たち＝熊本市中央区

平成28年4月15日　熊本日日新聞より

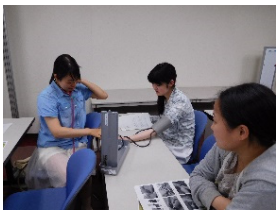
1

2016年5月26日、本年度最初の地域医療ゼミが開催されました。
4月に発生した熊本地震を受け、学生自ら被害の大きかった地域で活動をしたいとのことで、8月に予定していた夏季学生地域医療特別実習の内容を改めて話し合いました。



2

2016年6月23日、本年度2回目の地域医療ゼミが開催されました。
5年生が中心となって、手動で計測する血圧計の扱い方の講習を行いました。



3

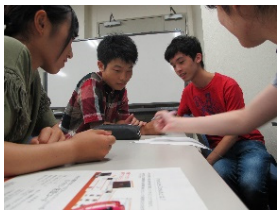
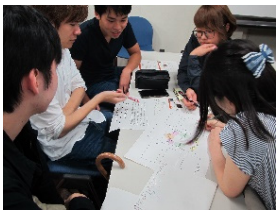
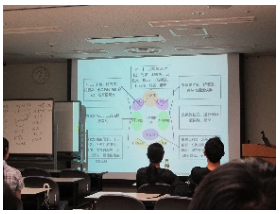
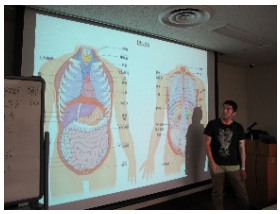
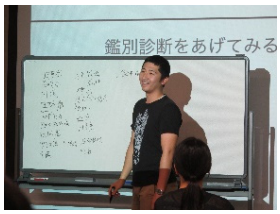
2016年7月22日、本年度3回目の地域医療ゼミは第8回地域医療・総合診療グランドラウンドへの参加として行われました。
（グランドラウンドについてはP.25をご参照ください。）

4

2016年8月17日から8月19日までの3日間で、夏季学生地域医療特別実習を開催しました。
（実習についてはP.41をご参照ください。）

5

2016年9月29日、本年度4回目の地域医療ゼミが開催されました。
今回は「腹痛」をテーマに臨床推論を行いました。
各学年でグループを作り、患者の話からの推察、腹部の診察からの推察、検査結果からの推察、と段階を踏んでじっくり話し合いました。

6

2016年10月27日、本年度5回目の地域医療ゼミが開催されました。
今回は「神経診察」をテーマとして眼球の動きを見る診察の動きを実践してみたり、実際の症状の写真を見て、どの神経に異変があるのかを考えました。

7

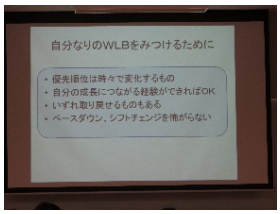
2016年11月24日、本年度6回目の地域医療ゼミが開催されました。
今回のテーマは「BLS」です。模型を使って実際に心肺蘇生法の処置を体験しました。

8

2016年12月8日、本年度7回目の地域医療ゼミが開催されました。
今回はcinemeducationの企画を行いました。選択した映画は「明日の記憶」という若年性アルツハイマー型認知症についての映画です。映画を見ながら、患者自身の生活、患者の家族の生活、そして医師の心理や対応について考えました。

9

2017年1月18日、本年度8回目の地域医療ゼミは平成28年度医学生・研修医などをサポートするための会セミナーへの参加として行われました。（セミナーについてはP.14をご参照ください。）



10

2017年2月17日、本年度9回目の地域医療ゼミは第9回地域医療・総合診療グランドラウンドへの参加として行われました。（グランドラウンドについてはP.25をご参照ください。）

11

2017年3月23日、本年度最後の地域医療ゼミを開催する予定です。

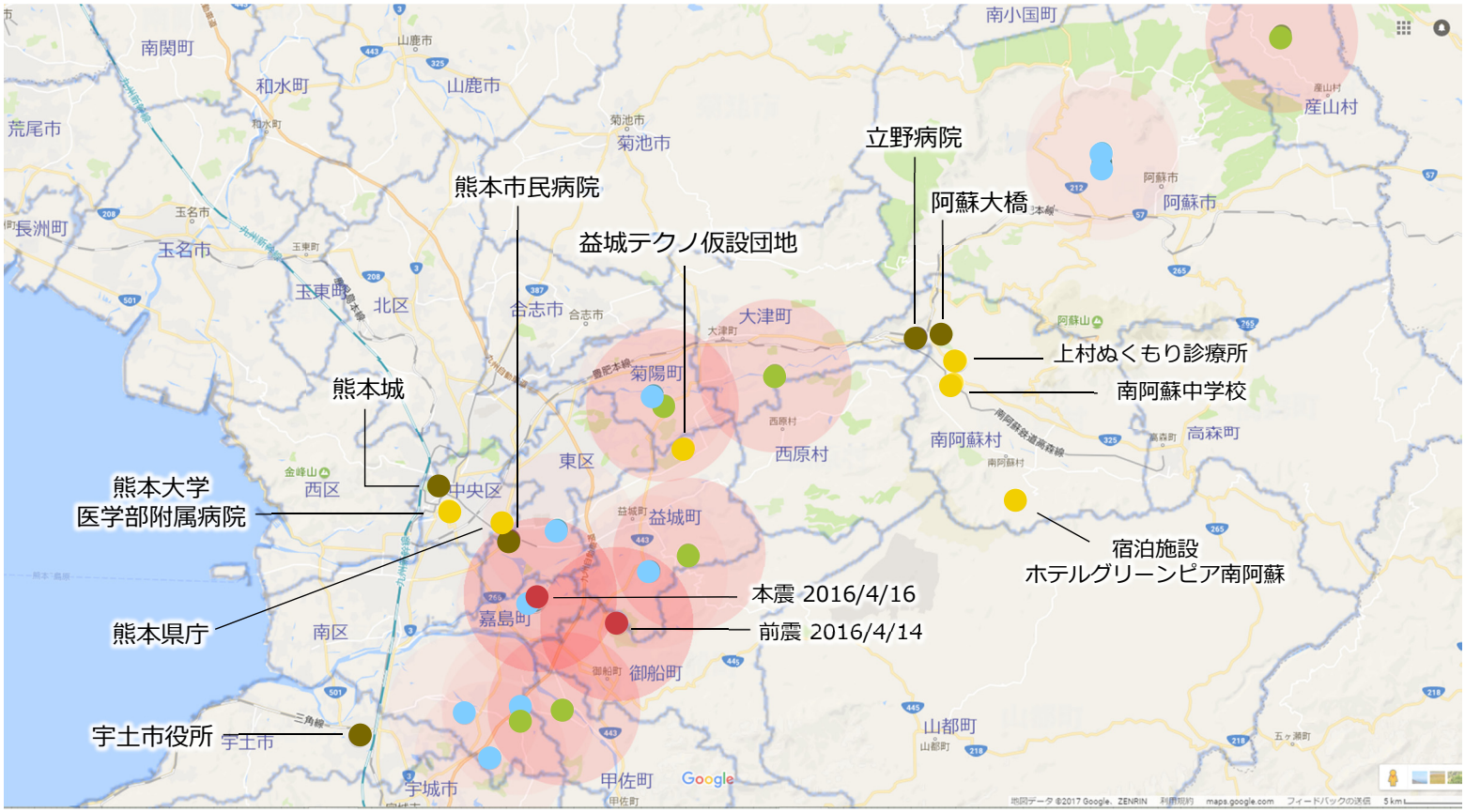
2.平成28年度夏季学生地域医療特別実習

概要

夏季学生地域医療特別実習は、地域医療システム学寄附講座が設置された平成21年度から始まり、地域医療・総合診療実践学寄附講座へと引き継がれ、本年度で７回目となる本講座最大の行事となっています。

その目的は、本講座の設置と同時にスタートした熊本県医師修学資金貸与制度の受給学生に対し、毎月実施している地域医療ゼミの延長として、フィールドワークにおいて実体験することで、地域医療の抱える問題を自ら学び深く理解してもらうことや地域医療の魅力を発見してもらうことであり、更には、将来地域医療に従事する際に、仲間として密に接することになるであろう、熊本県出身の自治医科大生と友好を育む機会を提供するという意味も持っています。

昨年度末の時点では、水俣市立総合医療センターを拠点に、芦北、水俣地域で実習を行うことを計画していました。しかし、4月14日及び16日に発生した大地震により、多くの住民が被災を被り、その状況から立ち直っていない中で実習を行うことの是非を議論した結果、今回は、学生から、被災地に出掛け自分たちでできることを通して、地域を知る機会としたいとの強い要望もあって、従来の地域医療実習とは違った内容で実施しました。



- 今回の実習の関連施設
- 熊本地震時に倒壊・被害の大きな施設等
- 震央から半径5kmほどの範囲
- 震度7の震央
- 震度６の震央
- 震度5の震央

※ 4月中に熊本で発生した、震度5弱から震度7までの地震の震央です。

Ⅱ 活動報告

◆ 熊本地震の状況①

『熊本県における平成28年熊本地震への対応について』

熊本県の地震による県内の避難者の推移とライフラインの復旧状況、仮設住宅の着工状況や県庁の医療分野における取組について以下のことをお話しいただきました。

・DMATの派遣要請
・DMATから医療救護班への引継ぎ
・医療機関からの給水要請への対応
・しばらく避難（中長期避難の推進）

熊本県健康福祉健康局
立川　優　局長

◆ 熊本地震の状況②

『熊本地震 発生からその後の対応～災害医療の現場～』

地震発生直後のご自身の被害や益城町の被害について、多くの写真をもとに話していただきました。

災害医療の現場での活動内容や、上益城圏域災害医療調整本部の立ち上がりから閉所までの流れ、今回の経験からの問題点とその対応策について等をお話しいただきました。

上益城郡市医師会
永田　壮一　会長

◆ 熊本地震の状況③

『熊本地震における精神医療支援』

東日本大震災での精神科医療について、DPATとその役割と熊本地震でのDPAT活動について、中長期における心のケアの重要性についてお話しいただきました。

熊本県精神保健福祉センター
矢田部　裕介　先生

8/17	
開始	内容
	集合
9:00	開催挨拶
9:05	オリエンテーション
9:15	熊本地震の状況①
10:00	熊本地震の状況②
10:45	熊本地震の状況③
11:30	昼食 （PFAについて学生からの説明）
12:15	バスで移動 熊大病院⇒テクノ団地
13:00	実習の注意点など
14:00	聞き取り調査①
15:00	休憩・途中説明
15:20	聞き取り調査②
16:30	聞き取り調査振り返り
17:30	バスで移動 テクノ団地⇒ﾎﾃﾙｸﾞﾘｰﾝﾋﾟｱ南阿蘇
19:00	懇親会
	宿泊

質疑応答

開催挨拶

PFA説明

◆ 聞き取り調査

益城町のテクノポリスセンターで、聞き取り調査の内容や、聞き取り調査での注意事項などの説明をしていただき、テクノ仮設団地での聞き取り調査にも同行していただきました。また、調査後の聞き取り調査の振り返りでも、調査におけるまとめなどをお話しいただきました。

熊本大学
政策創造研究教育センター
円山 琢也　准教授

【聞き取り調査の内容】
- 入居日
- 以前の家について
- 今後の住まいについて
- 家族構成など
- その他、意見や要望など

8/18	
開始	内容
8:10	朝セッション（前日の振り返り）
9:00	熊本地震の状況④
9:50	熊本地震の状況⑤
10:45	午後に向けての準備
11:30	2つのグループに 別れて活動
17:00	移動 実習先⇒ﾎﾃﾙｸﾞﾘｰﾝﾋﾟｱ南阿蘇
18:30	夕食
	宿泊

朝セッション

◆ 熊本地震の状況④

『阿蘇医療圏の現状と将来への展望』
『熊本地震　そのとき阿蘇は！』

阿蘇地域での阿蘇医療センターの役割と、地震に耐えた免震構造について、ADRO（阿蘇地区災害保健医療復興連絡会議）が果たした役割などをお話しいただきました。

阿蘇医療センター
甲斐　豊　病院長

◆ 熊本地震の状況⑤

『熊本地震に対する保健医療活動報告』

阿蘇地域の地震の被害についてや、災害医療とは何か、阿蘇管内の保険医活動についてお話しいただきました。

阿蘇保健所
服部　希世子　所長

◆ 南阿蘇中学校での実習

8/18　①中学校グループ	
時間	内容
11:40	マイクロバスで移動 （南阿蘇中学校へ）
12:15	先生との交流（兼昼食）
13:30	生徒との交流（ゲーム）
14:00	夏休みの宿題チェック１
15:00	夏休みの宿題チェック2
16:10	教職員の先生と一緒に 午後の活動の振り返り
16:40	マイクロバスで移動 （ﾎﾃﾙｸﾞﾘｰﾝﾋﾟｱ南阿蘇へ）

◆ 上村ぬくもり診療所での実習

8/18　②診療所グループ	
時間	内容
12:30	マイクロバスで移動 （上村ぬくもり診療所へ）
13:00	オリエンテーション
13:30	レクチャー・見学 陽ノ丘荘/ GHひなたぼっこ/ ぬくもり診療所
15:00	診療所車で移動 （老人ホーム等へ）
15:20	訪問診療 はなみずき/はなしのぶ/ GH南阿蘇
16:45	診療所車で移動 （ぬくもり診療所へ）
17:10	マイクロバスで移動 （ﾎﾃﾙｸﾞﾘｰﾝﾋﾟｱ南阿蘇へ）

8/19	
開始	内容
8:30	発表会
10:30	講評
11:15	バスで移動 ﾎﾃﾙｸﾞﾘｰﾝﾋﾟｱ南阿蘇⇒そば道場
11:30	昼食
12:30	バスで移動 そば道場⇒熊大病院
14:30	解散

◆ 学生発表

発表①

益城町での聞き取り調査

5年　森脇健次、岡田雄二朗

4年　中原大智

3年　川中みなみ、榎本悠美

2年　安倍悠乃、辻本一真、林田夏南子

1年　佐藤実紗、持田香織、吉岡幸英

仮設住宅後の住まいについて、小さな家でもいいので元の場所に家を建てたい、住んでいた地域に帰りたい、だが、家を建て直すお金も準備できないので仮設を出た後どうすればいいのか分からないという方が多かった。
行政の対応、収入面の安定、コミュニティの形成など、今後の改善点が多い。

コミュニケーション能力の大切さ、患者さん（立場の弱い人）との接し方、話の聞き方、１人１人のニーズに合わせた対応、地域の特性を理解する必要性などを実感した。これを今後に活かしたい。

発表②

益城町での聞き取り調査

5年　松岡隼平、松森千里

3年　吉田龍也

2年　詹翔叡、松田崇秀、浦川朋也

1年　鶴田恵理、武元勇人、高橋啓太、織田ゆめ子

全体を通して、がれきの撤去を早くしてほしい、ペット同伴の家庭への対応、高齢者の憩いの場、子供の遊び場がほしい、情報が少ない、という意見や不満を持つ方が多かった。今後の生活の中で、筋力低下、熱中症、腰痛などの不調や、子どもの発育の遅れ、ストレスによる心の病、栄養の偏り、タバコの影響等の問題が考えられ、その問題に対し、運動できる場所を作る、相談室を作る、喫煙所を作るなどの対応策を考えた。

発表③

益城町での聞き取り調査

5年　山下ちひろ、井上大暉

4年　春木沙良、宮野遼太朗

3年　奥田綾乃

2年　丸目高大、千田麻由子

1年　白奥光一、安川賢治

多かった問題として、支援金が来ない、コミュニティを作ってほしい、情報が入ってこない、身障者に対する配慮が必要であるということが挙げられた。それぞれの対策を考える話し合いをしている中で、住民の方が問題点に関する解決のアイデアを持っているということを知った。住民の方と話をして、今後の不安を強く感じた。復興の道のりは長く、被災された方のことをもっと知らなければならないと感じた。

発表④

南阿蘇中学校～中学校教員との交流～

川中みなみ　松田崇秀　佐藤実紗　武元勇人

林田夏南子　安川賢治

地震後、生徒の安否確認や教員同士の情報共有にとても苦労したということを知った。今年４月に３つの中学校が統合されたばかりで、なおかつ始業式から５日という時期で安否確認が非常に困難だったという。

また道路の寸断によって、生徒の通学だけでなく教員の通勤も困難になっているということや、生徒の進路についてなど、様々な問題が起きていることを知った。

医師とは違う視点から、震災について知ることができたのは良い経験になった。

発表⑤

南阿蘇中学校での実習を通して

安倍悠乃　鶴田恵里　高橋啓太　吉岡幸英

浦川朋也　辻本一真　織田ゆめ子

生徒たちは思ったより元気だったが、交流時に地震のことについては一切話すことはなかった。教師には1対1になると話してくれるという。

生徒たちの精神力の強さを感じる一方で、後に張り詰めていた糸の切れるのが心配である。

相手から本当の気持ちを引き出すためには工夫が必要だということを感じた。

教師たちの話から、他職種連携の大切さやコミュニティでのつながり、協力が大事であることを学んだ。

発表⑥

南阿蘇中学校での実習を通して

吉田龍也　奥田綾乃　丸目高大　詹翔叡

白奥光一　武元勇人　持田香織　榎田悠美

千田麻由子

先生たちの通勤の負担や地震が及ぼした生徒への影響を知った。

今後、同じような震災が起こったときに、行動を起こせる人になってほしい、また、なりたいと思った。

自分たちが求められる医師像を考える機会を得た。

物事の答えを渡すだけでなく、その理由を伝える意義や、初対面でも話しやすい雰囲気を作るために必要なことを考えるきっかけとなった。

発表⑦

南阿蘇における被害と復興

5年　山下ちひろ、森脇健次、岡田雄二朗、松岡隼平

場所や環境が変わっても、いつものかかりつけ医に診てもらえるということの患者さんに与える安心感の大きさを知った。

いざというときに支援を求めるネットワークを普段から構築していくことが、今回のような死者ゼロという結果につながるのだと感じ、常日頃から人と人との間柄（人間）を大切にしていこうと思った。

地域に対する責任感を持ち、利益を度外視してでも、患者さんのために奔走する姿に感銘を受けた。地震などの緊急事態に関わらず、地域に対して責任を持って医療活動に従事するということは、将来自分たちが医師になったときの基盤になるのではないだろうか。

発表⑧

立野病院の関連施設・訪問診療

５年　井上大暉、松森千里

４年　中原大智、宮野遼太朗、春木紗良

施設の被害や、入居者・サービス利用者の動向などを上村先生に話していただいた。地震後は職員の通勤に配慮して朝食を遅く、夕食を早くするなどの工夫もしている。

施設の見学をしたのち、老人ホームでの訪問診療体験を行った。問診、身体診察、ポータブルエコーを用いた診療などを行った。

聞き取り実習の様子が平成28年8月18日の熊本日日新聞で取り上げられました。

仮設 困り事ありませんか

熊本大、自治医大生が調査 益城町

仮設住宅の入居者に困り事などを尋ねる熊本大医学部の学生たち＝17日、益城町

熊本地震の被災地の現状を深く知ろうと、熊本大医学部の学生らが17日、益城町の応急仮設住宅「テクノ団地」で、入居者の困り事や仮設住宅後の住まいのニーズなどを聞き取る調査をした。

県医師修学資金の貸与を受ける熊大の学生と、自治医科大の学生が行う「夏季地域医療実習」の一環。被災地の住民らの声を直接聞き、将来の地域診療活動に生かしてもらうのが狙い。

熊大が被災地で展開する復興支援プロジェクトチームに協力する形で調査を実施した。32人が参加し、3人ずつのチームで1戸ずつ訪問。4人暮らし家族の主婦、米原順子さん(67)は「自宅は大規模半壊。同じ場所に建て直して住み続けたいので、取り壊しを急いでほしい」と訴えた。

熊大医学部5年の山下ちひろさん(24)＝熊本市中央区＝は「最初は何も困っていないと言う人も、じっくり話を聞くと、本音をもらされた。患者の本音に気付ける医師になりたいと感じた」と話した。

（清島理紗）

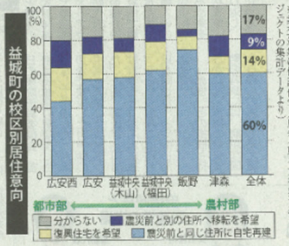
今回の実習での聞き取り調査含めた結果がまとめられて、平成28年10月5日の熊本日日新聞に掲載されました。

「将来も益城に」74%

熊本大など仮設住宅調査

地盤、資金 自宅再建 不安も

◀県内最大の516戸が並ぶ益城町のテクノ仮設団地＝7月14日



※調査対象は仮設住宅入居者。熊本大復興支援プロジェクトの集計データより

熊本大の学生らが益城町の仮設団地（17カ所、1553戸）で実施している聞き取り調査の中間まとめで、7割を超える町民が、将来も地元で暮らしたいとの意向を示していることが4日、分かった。一方で自宅再建に関し、多くの人が資金や防災上の不安を抱いており、自宅再建への支援や情報提供、機動的な防災対策の必要性が際立つ結果となっている。

【9面に関連記事】

調査は熊大震災復興プロジェクトチームの円山琢也准教授（環境学）と学生らが、県立大や熊本学園大などの協力も得て、町内全17カ所の仮設住宅で10月末まで（7～11日）に行った。

校区別では、広安など新興住宅地に比べ、益城中央（木山）や飯野などの住宅からの住民や高齢者が多い農村部で、元の場所での自宅再建を希望する人が多い。

「震災前と同じ住宅に再建したい」と答えたのは約1千棟のうち、全壊・大規模半壊は約4300棟、半壊が約2400棟に上り、地盤の沈下や損傷も目立つ。このため、調査への回答では「自宅再建できる地盤かどうか情報が欲しい」や「年齢的に住宅ローンを組むのが難しい」など不安の声もあがった。

調査では、高齢者世帯で復興住宅への入居を希望する人が多数。60代以上の一人暮らしは100人以上で、仮設団地には1人暮らしの高齢者が100人以上いる。孤立化、孤独死を防ぐには見守り体制の強化が求められる。

（原口敬子）

益城町仮設住宅調査 円山熊本大准教授に聞く

再建焦らず じっくりと

円山琢也准教授

益城町の仮設住宅入居者への聞き取りで、将来も地元で暮らしたい、と考える人が7割超に上った。訪問調査を続ける熊本大震災復興デザインプロジェクトチームの円山琢也准教授（環境学）に、被災者の現状や必要な取り組みを聞いた。

（原口敬子）

【一面参照】

これまでの聞き取りでは、前向きな人が多い印象があったが、じっくり話を聞くと、自宅再建のめどが立たないことへの不安や、仮設住宅での生活に慣れず、眠れないなどの不安が見えてきた。

一方、意外に多かったのは「自分たちでできることはやりたい」という声だ。震災直後はインフラ復旧や仮設住宅の建設など、行政の支援が不可欠。しかし、ある時点からは、自分でできることは自分でやる「自助」、周囲と協力する「共助」を増やし、行政による「公助」との、すみ分けが必要になる。

調査に対して「先のことを考える余裕がない」「話したくない」という人たちは、より深刻ではないか。彼らが益城町に住み続けるにはどういう選択肢があるか、手厚くサポートする必要がある。

他の人が生活再建に焦って自宅再建をしようとすると、不安になるだろう。だが被災者の課題はそれぞれ異なる。焦って自宅再建などを進める必要はない。少なくとも仮設住宅には2年間住めるので、自分の課題と対応策、選択肢をゆっくり考え、自分に最大限できることは何かを見極め、再建に向かってほしい。

把握できただけでも仮設団地には1人暮らしの高齢者が100人以上いる。孤立化、孤独死を防ぐには見守り体制の強化が求められる。特に男性は、女性に比べてコミュニケーションが苦手な人が多い。男性にしかできない役割を担ってもらうなど、コミュニティーに溶け込んでもらう工夫が大事だ。

（談）